

# ニルガヤの巻

## 威神の巻

歎徳章 (一部) 要解……………一

後編

性起……………三

清淨性が染汚心となる……………三六

流轉還滅……………四〇

染淨緣起……………四三

性起……………四四

五性各別……………四四

### 前編

彌陀に三身あり。法身と報身と應身となり。

法身とは彌陀の本體即一切萬物の根底にして、天地萬物はこれより生じ此に依て保  
存せらる。法身は靈妙不可思議にして形相なく、目に見手に觸べきものに非ず。一切  
の處に周遍して實に在せざる處なし。始めなく終なく常恒存在なり。一切萬徳の本體な  
るが故に法身と名づく。

報身とは法身より發展したる萬徳圓滿の相なり。彌陀の本體は元と無色無相なれど  
も、無相の相は實相にして、相として相ならざるなし。一切の萬類を救靈せんが爲に  
無量塵沙の相好を顯現し、神靈正義恩寵の屬性を以てし、其徳たる玄妙不可思議にし  
て、無上の智、無限の慈悲、無限の威力。

精神應四方上一切の處に彌曼せるが故に、世界衆生の意象は森然として彌陀の大

一

圓鏡智に炳現し、また無限の慈悲を以て常に之を擁護し、無限の願力を以て之を攝取  
して捨玉はず。又彌陀は常住安樂自在清淨、徳として具備せざるなし。常に至眞至善  
至美なる眞理の靈界最高の處に儼臨し、無量の聖徳と靈福とを以て一切の衆生を攝取  
し同化する。之を報身と名づけ上る。

應身とは、法身と、智相の報身無碍の光明は宇宙に充滿し、所有る刹土の人類を救  
濟すべき福音を宣傳せんが爲に、其刹土の人類に應同して神靈格の靈が肉身を受けて、  
八相示現して人類を救濟す。即此界の釋迦牟尼の如し。十方の國土皆然り。各一佛  
身を應化して救靈の道を宣傳す。

法身は大靈の如く、處として徧せざるなし。報身の智相は太陽と光の如く照さざる  
處なし。應身は光明の間を破し又影萬水に映現するが如し。

### 二身

二種の法身とは法性法身と方便法身となり。法性法身は萬物の本體、理體にて色相  
なく、言語道斷に、唯一實の本體なり。

方便法身とは法性法身より開展して一切の迷没の衆生を度せんが爲に方便法身を現  
す。即ち法藏と現はれ、不可思議の誓願を起し、殊に光明と壽命無量との弘誓を本と  
し、無明と罪惡に亡びたる生靈をして解脱し靈化せしめんが爲の大願已に成就して、  
盡十方無碍光の身と現じ、普く無邊の微塵の刹土を照して、衆生を攝護したまふ。こ  
の無碍の光は、法身智相は、法身と等しく徧く滿せざる處なし。此光より微塵刹土に  
應身を現じて衆生を度したまふ。

### 世界二種

清淨國土と穢惡の國土となり。法性、全宇宙の同體業感の二様の兩方面なり。

清淨國土は法身より法藏を出し、法藏より眞善美を發現し、無量の無性の靈福積極

三

に顯現したる妙境界なり。觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虛空、廣大無邊際とは是なり。

釋迦牟尼曰、「我三界の如くに三界を見ず」是宇宙の眞理を如實に顯はれたるを淨土と名づく。是と同時に現宇宙を現世界の衆生及び六道の衆生が感ずる處、同體異様に感ずること一水四見の譬の如し。穢土は衆生垢穢の心質より感ずる處、六趣其心垢の度を異にするが故に、所感の身及び世界差別あり。一方は心垢穢をさりと眞理の如實を現し、至眞至善至美の眞理の靈界と顯はれ、一方は心垢穢の素質の皮殻を被りて、靈惡の境界と現はれたり。人々彼我の執着より自ら少分を執して身土を顯はす。一方は主我を脱し同じく無限の光壽と致一して無限の靈徳と靈福に充さる。

一方は眞理の無量光壽に歸して、主我及び屬性を脱却し靈化したる人の歸着する處、一方は眞理の光壽を知らず主我及び執着不靈福を脱却せずして無明生死の衆生が沈轉する處なり。

三位一體なれども、今佛とは三位釋迦牟尼を云ふ。は無碍光より此土の衆生を救はんが爲に人格を以て福音を宣べ傳へたまふ。釋迦牟尼是なり。牟尼尊は人格を以て圓滿なる彌陀の聖徳を顯したまへり。若し大宇宙に眞理の無碍光質在せずして此小宇宙なる牟尼の身に其徳のあらはるゝ理あることなし。牟尼は是教祖なり。救世主なり。阿難とは多聞第一の弟子、之を聞き違ふことなく失ふことなく之を傳へて後昆に及ぼす經家なり。

無量壽佛とは梵語にて阿彌陀、即ち三位即一體の總稱なり。無量壽佛威神と光明を體と相と用との三大に配せば、無量壽佛は體徳。最尊の威徳廣大にして盡十方法身質在せざる處なく、亦施作せざる所なし。

最尊は威徳絶對にして匹敵するもの有ることなし。何とならば若し絶對に非ずして他に均敵有らば衆神ありて各其威を限羈ある故に絶對なる至尊ならざればなり。最尊は粹然至純にして靈質の混雜あることなし。衆生の惡素質あるが如きに非ず。

五

至純の性徳を顯さんか爲に選擇本願を示されたり。

至尊は不易にして常に同一なり。凡そ萬物一として變化して常住なるもの有るなし。其所以は未だ圓滿なる極度に達せざる爲なり。至尊は圓滿充足して缺くる所なきが故に變易なし。至尊は無限にして一切處に實在し又光被せざるなし。遍空間の故に一時に一切處に妙用を施さざるなし。斯の如く絶對至純の無限にして空間に遍在し常に同然不易にして時間に遍在する神靈態を無量壽と號したてまつる。

### 威神光明最尊第一

威神とは相大。其相神靈態にして、至尊の無上の智慧無上の慈悲。神靈態とは其質絶對的理性にして大智慧光明普く法界に遍照せる義なり。

正義は威神の光明即ち勢能の智慧なり。之を信仰して此に致一するものは自ら正義ならしむる徳なり。

神靈態とは勢能の智慧にして之に對するものをして神聖同化しすべての惡性を脱し至眞にして侵すべからざるの性に靈化す。恩寵とは唯嚴肅のみにあらず、無上の慈悲を以て既に罪惡に亡びたる精神をして恩寵に感謝して自ら回復せしむるの恩寵なり。光明とは其體は神聖體至純なる理性にして眞理なり。これはこれ一切智慧の相なり。また無上の慈悲ありて萬類を哀愍攝護する徳なり。

光明も其質は神聖態正義と恩寵威力等の所有る靈徳を包含せる精神態にして、空間に遍在せる不可思議の光なり。即ち無上の智慧と無上の慈悲の心靈態なり。かく無上の智慧と慈悲との神聖正義恩寵の精神が、一切處に充滿して、信する衆生の精神をして神聖同化せしむる妙用あり。

光明の用は人の惡素質を脱却して自性の如くに靈化するにあり。

七

最尊第一とは同位中の異階級にあらずして、彌陀は三位を三位總稱するなり。

至尊と諸佛の本末の關係は至尊は絕對獨一の神尊にして他に匹敵すべき神あることなし。至尊十方一切諸聖を統攝する本佛なればなり。

至尊は一切衆理の歸する處を離れて終局目的あることなければなり。第一とは第一義にして二義なきの謂なり。至尊は絕對的第一義にして統一的本佛一切諸佛を分化し一切萬類を攝護する尊位なり。

諸佛とは至尊の分身にして十方のすべての世界に應化し、人類に應身を以て八相成佛の化儀を以て人格を以て至尊の聖徳を示し、救世主として救靈の道を宣傳する聖者にして此士の牟尼世尊の類是なり。一佛國土毎に各々一化身を出して福音を宣て人類を度す。之を諸佛とす。諸佛本みな至尊の分身なれば之を末と名づけ、統一せる本體を本と名づけ、末を攝して本に歸すれば諸佛即ち彌陀なり。一月天に在て影萬水に現す。之を一體不二の本末の非一の義なり。

無量光

法身の徳。

是彌陀の本體にして、又一切萬法の根底なり。其體不可思議、起信論に一切諸法本より已來言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離れ、畢竟平等にして變易有ることなし、破壊すべからず、唯是一心、故に真如と名づく。其體高廣にして法界を包含す。毘盧遮那一切處に徧す。三際に徹達し此本體即ち彌陀の法身なり。

無量とは無限にして法身無限の體なり。光とは法身諸の垢を除き自性清淨法身なり。自體光。證得の智、其本質は絕對的理性にして純粹至眞の精神體なり。

是の如く純粹理性大精神體は無限にして一切處に實在す。之を無量光と名づく。光明の徳用を彰す。何ぞ佛と名になつくと云ふに神靈的精神體なるを以て佛と云ふ。

單に光明と云はゞ色即物質態に簡する爲めに精神體を彰す爲に佛と云ふ。大智慧光明態を光佛と云ふ。

本體即ち絕對理性大精神光明を清淨法身と云ふ。佛の方面には無限の體。此法身の理に垂き無限の理性に迷ひて無明となり有限なる生滅の妄心となつて、無量差別の萬類と變じ來る。此心性は不可思議の性能より無量の差別の體質を現し來る。個々無量差別の法界を現すも、十法界三世間を出でず。十法界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六凡と、聲聞緣覺菩薩佛界との四聖となり。十法界の衆生、稟くる所の身體と心機と所依の國土と無量差別の主質と現はるれ共、其が理を究めて原理に至れば、法身の本體を根底と爲さざるものなし。故に法身の本體より論ずる時は、彌陀を以て萬物の父とし、萬法悉くこの法身の本體より産出せざるものなし。之を以て萬物の父と稱すべき理あり。

六凡の分段、生死の體質を論せば、地獄に八地獄、各々無量の分段あり。九種の餓鬼、三十四億の畜類、四種の修羅、四州の人道、三界二十八天、この中に於て又各無量の差別の身體と心質と國土に無量の種類あり。植物に無數の種類あり。聲聞の二十七賢聖、緣覺の二類、菩薩に無量の變易の身、佛に無量の應化身。

六凡は法身の本體より産出せられたるも、迷ふて其根底を認らず。彌陀無量光は法身より産出せし個々無量の差別界の衆生を照して遺すことなし。彌陀は自己の法身より産出せし一切の萬類を照して一時一念に普く無量の界個々の一切を照したまふ。

此光によりて自己の根底を究むる時は個々の本體もと法身の一分たることを認識することを得べし。

六凡の衆生は自己の本體は彌陀の法身たることを覺らず、我を執して無明によりて自ら生死を出づること能はず。

聲聞緣覺の二乗は此光によりて真空の一面のみを證して未だ聖徳具存せることを識らず。菩薩は真空の理を悟り共に自己本來彌陀の法身の分たることを悟り大圓覺を證せんと願求す。

佛界は法界清淨の徳悉く顯現して缺くることなし。

此の光明の用は自己の本體より出で、有限にして生滅の個體となりし衆生を照して自性は本彌陀法身たることを覺悟せしむるにあり。

佛の方よりは統一の無限量にして九法界は有量の個體なり。

十方無量の諸佛は個體を以て無限の徳を證す。故に諸佛を統一すれば彌陀一體なり。彌陀應現の時には無量の個體なり。無量の應佛を以て法界周徧せる法身を顯はす。一切衆生自己の根底に向て一心に彌陀を念じ其根底に達するとき、自己の根底無限にして絶對理性無量光法身の光なるを發覺することを得べし。自己の如く一切衆生悉く同一根底即ち彌陀法身ならざるはなし。

無邊光 般若の徳。

是前の無限の法身なる本體の屬性にして、三大の中には相大なり。法界に周徧せる光明智慧の相にして阿彌陀佛に屬性なる四智十力等なり。其本質は法界に周徧せる大智慧の精神にして神靈態正義恩寵等なり。不可思議の聖徳と靈福を以て屬性として大精神態光明となりて法界を徧照す。起信論に眞如の相とは是なり。

神靈態絶對眞理の大智慧光明の無邊の聖徳あり。無邊の威神的勢能ありて十方に晃耀す。是に對する者をして神聖にして侵すべからざるの相を表彰す。又不可思議の恩寵ありて法界を彌覆せる慈仁的光明なり。畏敬すべし。欽仰憧憬すべし。屬性たる神靈態は太陽の明かにして萬物を見べく恩寵は溫暖にして萬物を撫育するが如し。無邊聖徳を以て莊嚴せる大精神態光明は無限の法界に徧滿して實在し光被せざる處なきも、無明が此神靈態光明を覆ふて無邊の個體の精神には主我の屬性となりて、無邊の聖徳の反對として無邊の無明と煩惱なる罪惡の闇黒態精神となりて、無邊の罪惡の衝動となりて無邊の法界に無邊の國土及び身體精神との屬性となりて染汚無智の精神となる。

本體無邊際の故に屬性も無邊なり。之に迷没せる衆生もまた無邊なり。衆生無邊の

故に衆生の屬性たる身體と心機屬性との煩惱無邊なり。迷の心相無邊の故に稟る處の身相また無邊、心性もまた無邊なり。是に依て迷悟善惡差別の相によりて十界無邊の衆生の相貌と性質とに顯現す。

法性無邊の故に迷も無邊なり。故に六凡の衆生地獄に無邊の苦相と惡性とあり。餓鬼畜生もまも爾り。三善道に無邊の衆生、六凡の衆生は自己の心性に無邊の聖徳を顯すべき性能あるを識らず。

二乘は此光に消極の方面のみにして單に屬惡性なる煩惱を脱却すれども、無邊の聖徳を顯はすこと能はず。

菩薩は無邊煩惱の惡質を脱却すると共に無邊の聖徳即ち三身四智十力等め屬性を顯はさんと願望す。

佛果は已に無邊恒沙の聖徳屬性なる四智十力十八不共法三十二相八十種好等の性と相とを圓滿に顯現す。

無量光——法身——本體

1. 法身如來藏性は是萬物の本體、一元の理性是業理の根底。

2. 一理の自性を守らば無量差別の理性を具し十界の妙理迷悟善惡の性を具す。

3. 無量差別の本體を照して、一如天眞の法身を顯示す。

無邊光——般若——屬性

1. 實相は無明なく、色心もなく、善惡迷悟に非ず、また好醜なし。

2. 無相の本より一切の相を顯す。十界各々十如の屬性を具備す。無邊の性相によりて現れ、恒沙の煩惱も悉く屬性。

3. 無邊光をもて屬性を照せば煩惱本是菩提の性。

無碍光——解脱の徳——活動自由。

1。本體は天然の自爾。造作よりなるものに非ず。

2。十界各十界の性能を具備し、心の作用によつて百界千如乃至三千の法界を變作す。

無量光

1。本體は絕對にして主體なし。主體現るゝが故に客體。學理としては之を絕對大精神(一心)。宗教にては之を如來法身と名づく。

2。無限に限となり、不生に生となり、迷悟善惡十界の理顯る。性善惡を具し理に迷悟を、十界の依正の現象。

3。絕對清淨法身を發展して無量差別の自性を照すとき萬物一如の天眞を顯示す。是を無量光王と稱す。

無邊光

1。實相は無相にして色心なし。

2。無相に相を顯し十界の相。十界各々十如の屬性具備無邊の性相之によつて現れ、恒沙の煩惱悉く顯はる。

3。無相は相として相ならざるなし。無上の智慧無限の愛。神聖正義恩寵等。無邊の光を以て照す。

無碍光

1。法身無作自然造作の得てすべき所に非ず。是一切造作の源。

2。業川不可思議。十界は各々九界の性能を具備し、心畫師能く善惡を作り迷悟變化三千の界。

3。無碍光は不測の智、法身の智相一切に徧し。妙に報應身を現じては一切衆生を救度せざるなし。無碍光は衆生を悉く解脱し靈化するべき功德を有せる光なり。此光眞法身は何の用によつてか之を開展せしや。之を起信論に復次に眞如の用とは諸佛如來とは諸佛と本因地に在て大慈悲を起し諸の波羅密を修し衆生を攝化し大誓願を立て盡く

等しく衆生界を度脱せんと欲し、云々。

無對光

一時に圓證於三身萬德惣彰三四字

法身は本有なれば共若し修徳無れば終に顯はずこと能はず。性を全して修を起す。修に由て性を照す。修性相即して前に非ず後に非ず。故に一時と曰ふ。一を擧ぐ即三、三を全して即一、三一互融して並にあらす別にあらす。故に圓證と曰ふ。

本體は絕對にして明暗を越え、非明暗非迷悟、第二位に明暗迷悟現象す。然るにこの法界及衆生界は天然のならば黒暗態迷妄的なり。

この無明迷妄なる精神界より光明態至眞至美至善の靈妙界を開展し顯示せんが爲に、本體法身が即ち法藏てふ一人を現じてこの有限の現界と無限の實體と致一すべき契機を示されたり。

法藏とは法に約せば法身如來藏性なり。之を開展すれば即ち清淨法身とも三身圓滿の如來とも號すべし。人に約して云はゞこの本體法身より法藏なる人を化現して無量の願行をもて法身を發表して無量功德身を現はすべき道を開かれたり。法藏の願意は法身藏性を開展して眞善美を顯示せんが爲なり。彼の願文に、我作佛の國土をして第一ならしめん。其衆奇妙にして道場超絶し國泥洹の如く而も等雙なからしめんとは、第一第二より發展して天然超越して清淨界を顯さんと願意なり。また諸佛如來の二百十億の佛土より其の眞なる善なる美なるを選択し攝取して、穢惡を捨て善美を取ることとは、是天然界を開展して開明的の神靈界を顯すことなり。二百十億とは實には全宇宙を數を以て呼びたるものと知るべし。

個人精神も幼稚なる天然のより進て宗教的開展したる靈化の精神となるが如し。全宇宙の解脱靈化の状態を顯はし、この最終に圓滿に發展し至眞至善至美の靈妙界を淨土と名づけ、彼の方面に在て常恒不斷に同本體より産出せられつゝありて迷没する衆生を攝取し同化する所の徳用を彌陀と名づく。

本體と現界と神靈界とは同體の異方面なり。故にこの眞宇宙界は見る心の如何に依て其相を異にす。眼を閉てこの宇宙は絶對なる本體なりと觀念すれば、現象界を忘れて唯本體の方面を觀る。或方面よりは唯感覺界の現象界と現れ、又の方面より觀すれば盡十方無碍光如來のみあつて十方に盡せるが如し。

宗教は本より心理現象なるを以て精神をして宗教的機能充分に發展して齎化せば足りなん。

同體の異方面。

一水四見の例の如く、天は水を瑠璃と見、人は水と見、魚は空と見、鬼類は熱と見る。また青色の眼鏡をもて一切を見れば悉く青色ならざるものなきが如し。六凡の顛倒せる處の生得の眼を以て視ると、無所有定に入るもの見る處と佛は常に淨土を見るときいふも、プラトリーの觀念世界と感覺世界といふが如く、又華嚴の互爲主體は能く理を盡せり。因分より見れば常恒に菩薩なり。波羅密なり。果分の方面より見れば過去の久遠より常に佛なり。衆生界より見れば未來際を盡して衆生ならざるものなし。故に法藏比丘及び彌陀の因位は永劫にして因位の身衆生を度し果分のは十劫のみならず過去際より彌陀にして常に化度す。故に般舟三昧に三世諸佛念彌陀佛三昧に於て正覺を成すと。

因本願名號、正定業  
至心 信樂 欲生

蓮華藏世界に至りて眞如法性の身を證し  
煩惱の林に遊んで神通を現じ生死の園に入て應化を示す。

無量壽經の設我得佛、他方佛土の諸の菩薩衆我國に來生せば究竟して必ず一生

補處に至らむ。其本願ありて自在の化するところ、衆生の爲の故に弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸佛の國に遊んで菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上眞の道を立てしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。若し爾らば正覺を取らじ。

大經に其佛の國土は清淨安穩にし微妙快樂なり。無爲泥洹の道に次げり。其諸の聲聞菩薩天人智慧高明に神通洞達し、咸く同じく一類にして形に異狀なし。唯餘方に因順するが故に天人の名あり。顏貌端正にして世に超えて希有なり。容色微妙にして天に非ず、人に非ず。皆自然虛無の身無極の體をうけり。

導師觀經疏に云く、西方寂靜無爲、或は神通を現じて說法し、或は相好を現じて無際に入る、變現の莊嚴隨意出、群生見者罪皆除。

淨土論に云ふ、出第五門は大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して應化の身を示す。生死の園煩惱の林の中に廻入して神通に遊戲して教化地に至る。本願力回向を以ての故に出の第五門と名づく。

註に意に曰く、彼菩薩三昧中に生死の林に入て衆生を教化して佛道に向はしむ。往還共に衆生を救はんが爲のみ。此回向を首として大悲心を成就するを得。

又云。彼佛を見上れば未證淨心の菩薩、畢竟して平等法身を得。淨心の菩薩と上地の諸の菩薩と畢竟して同じく寂滅平等を得るが故に平等法身は八地已上法性生身の菩薩なり。寂滅平等の法なり。此寂滅平等の法を得るを以ての故に名て平等法身とす。此菩薩は報生三昧を得。三昧神力を以て能く一處一念一時に十方世界に徧して種々の一切諸佛及諸佛大會衆門を供養す。能く無量世界に三寶なき所に種々に示現して衆生を教化し常に佛事をなす。而も往來の想供養の想度脱の想なし。是故に此身を名て平等法身とす。此法を寂滅平等の法とす。

又云く、菩薩に四種の正修行功德成就せり。眞如は是諸法の正體なり。體如にして行すれば即ち不行。不行の行を如實修行と。體は一なれども義に於て四とす。是故

に四行一をもて正しく之を兼ね。四とは一佛土に於て身動搖せずして十方に徧す。種種に應化して如實に修行して常に佛事をなす。安樂國は清淨にして常に無垢輪を轉す。化佛菩薩は月の須彌に住持するが如きの故に、二彼の應化身一切の時前ならず後ならず、一心一念に大光明を放つて悉く能く徧なく十方世界に至つて衆生を教化す。種種に方便し修行所作して一切衆生の苦を除滅するが故に。三に彼一切世界に於て諸の佛會を照す。大衆餘なく廣大無量にして諸佛如來の功德を供養恭敬讚歎す。

十住(一)

若人我を念じ名を稱へて自ら歸すれば便ち必定に入りてあのくほだいを得。是故に常に信念すべし。

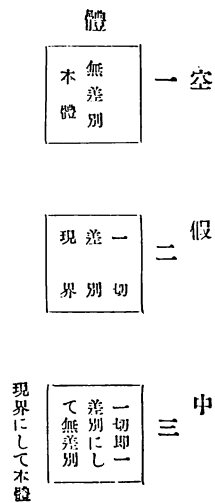
無量光明慧、身は真金山の如し。我今身口意をして合掌し稽首し禮し奉る。人能くこの佛の無量功徳を念すれば即時に必定に入る。是故に我常に念じ奉る。若し人佛にならんと願して心に阿彌陀を念すれば時に應じて爲に身を現したまふ。是故に我彼の佛の本願力に歸命す。

十方のよろゝの菩薩も來りて供養し法を聞く、是故に我稽首し奉る。

若し人善根をうへて疑、即花開けず、信心清淨なれば花開きて即ち佛を見たてまつる。十方現在の佛種々の因縁をもて、かの佛の功徳を嘆じたまふ。我今歸命し禮し奉る。彼の八道の船に乗じてよく難度海を度す。自ら度したまふ彼を度せん。我自在人を禮し奉る。諸佛無量劫に其功徳を讃揚せんに之を盡すこと能はじ。清淨人を歸命し上る。我今亦如是。無量の徳を稱讚す。この福の因縁をもて願くは佛常に我を念じたまへ。

世界觀

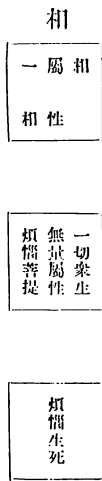
一は二を現し、三は二を一にす。



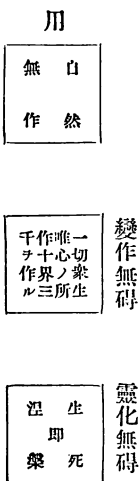
- 一、本體にして
- 二、現界無明にして差別を執す。
- 三、光明にて現界を照せば本性同體自己の光明萬物自性ならざるはなし。

無量差別の心にはさまゝのすがたかわるなれ。法身のひかりにてらすれば同一の眞身と證るなり。

うつくしきみにくき白きもくろきもやせたるもふとりたるもうはべこそかわれ、エツキス光線にてらすとき同じき白骨のみを見る。



- 一、實相にして無相
  - 二、無邊の煩惱無邊の聖徳
  - 三、無邊光を被れば煩惱即菩提となり、萬物交通徹照
- 無邊には交徹靈通なり、空間に十方を盡して無邊



- 一、無作自然

二、唯心所作十界三千を作る  
 三、無碍光。衆生生死解脫して同一涅槃  
 貪慾を思ふ心にて佛を念ひ法をのゝしる口を以て法を誑す。殺生偷盜の身を以て生をすくひ他にあたふ。

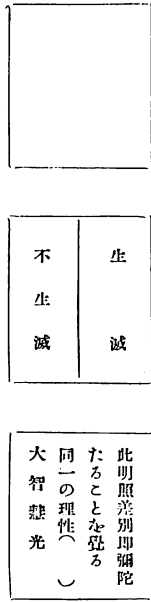
經に云く。十方無碍人二道より生死を出づ。一道は無碍道なり。無碍は生死即ち涅槃なりとする。(天照す神の御徳をなるときは、ねてもまめても有り難きかな)

無量光 法身 本體 絕對理性 心 佛知見 性清淨 日體の如  
 無邊光 般若 屬性 相 神聖正義思龍等 煩惱 恒沙德顯 日光明  
 無碍光 解脫 活動 用 一切能 業作因縁 解脫靈化 光明の用  
 無對光 三身邊滿 十佛自境界 十方諸佛超勝最尊絶對  
 炎王光 清淨法身と萬徳圓滿と無碍自在の妙用との超勝獨朗の無對光に反對せるすべ  
 ての之を覆ひ之を染め之を亡ひたる不真不善不美の精神質を滅殺する光なり

大精神

個體心

發展靈化 歸本靈化



一、本體にして一切萬物を産出する根底にして( )を産出し保存する處の無意識自然の大精神體之を彌陀の法身と名づく。本體は一切の理體にして差別の相あることなし。而れども是れ無量差別の根底なり。

二、無限の本體に自然に妙用ありて之より發生せられたる個體の心性は無量の差別ありて無量差別の個體精神態と顯現す。此差別の心性によりて差別の境界現はる。十界の依正是なり。

此心象を大に分てば二あり。一には生滅有限の六凡の心性。二には不生滅、無限と契合せる四聖の心性となり。

本體は一方には無限の生滅門となりて無量の個體的な心性となりて念々生滅して止むことなく、一より産出せられたる第二の個體。

三には一方絕對理性無限の眞理より第二の個體を元の一に歸せしめ無限の眞理に解脫靈化せんが爲の無限の光明なり。

一と二とは無量にして光にあらず。第三は無量光。

一は無量差別の無の量。第二は差別の無量。第三は無量即無差別。

第三深く自ら觀し自心も彌陀の分化たることを、絕對理性の光にて自己の根底を觀するときは自己即ち彌陀なるを悟る。自己の如く衆生またしかり。

性起

性起性は三性中の第一實性を謂ふ。即ち如來本然自性なり。謂く力より三展せられたる衆生を本性に回復覺醒せしめんが爲に、直接に衆生の心性に直覺的に交渉して衆生に飯本の道を與ふるを性起と云ふ。緣起とは世界の方面に因縁相關の法によりて行はるゝ義なり。

緣起は感覺的に外部よりの緣によりて、即ち法界に行はるゝ、佛敎經卷文字の法を、知識の敎授に聞法薰習によりて、自己の信因を動す如きは緣起と云ふ。其外部の聞法が動機と爲りて自信を發し、自ら如來の心光に接せんとの發願により、冥想三昧に神を凝して、心眼開發して佛を見る如きは性起なり。

起信義記に衆生の眞身と諸佛の體と平等不二、但だ衆生自ら眞理に迷ふて妄念を起す、是時眞如但見染相不顯其用。



彼本覺が内の妄心に薰するが故、厭求し真用即ち現す。

衆生の真心即ち諸佛體、更無差別故、華嚴、若人欲了知、三世一切佛、應當如是觀、心造詣如來、既從法身、起報化用、何得不是衆生真心耶。

問。若然らば、衆生心佛還自教化衆生、何故說言佛悲願力。

答。此真心是佛の悲願なり。謂無緣大悲及自體無障礙願等即性起大用なり。

華嚴性起正法品。

諸佛の出世を性起と云ふ。衆生は力に發展せられたる世界因縁の關係を経て生産す、故に緣起と云ふ。衆生は世界方面に在りて唯肉の生活を目的とし自己の靈性を開發して本覺の靈體に歸復すべきの真理を悟らす。こゝに於て諸佛は眞より出で、宇宙の終局目的は衆生性をして本性に歸復せしむるにあり。之を求心力と云ひ、また本願力と云ひ、性起と云ふ。是を一大事因縁と爲。

實に是宇宙に取りての一大事なり。故に諸佛出世を、智論に、須彌山の如きは無事小因縁を以て動すべからず。佛も亦然り、大因縁の故に般若波羅密を説て世間に流行せしむ。

法華に諸佛如來、唯以一大事因縁故、出現於世、謂欲令衆生開佛智見、使得清淨故、出現於世、欲令衆生、示佛知見故、出現於世、欲令衆生、悟佛知見故、出現於世、欲令衆生、入佛知見故、出現於世。

華嚴性起正法品に、如來正覺、性起正法、不可思議なり、所以者、非小因縁、成等正覺、出興于世、以十種無量無數百千阿僧祇因縁、成正覺出興于世、華嚴探玄、教起所由の大意に云く、諸佛出世は一切衆生を開化して本源に歸せしめんが爲なり、別して教起の所以十義あり。

一、法爾故。二、願力故。三、機感故。四、爲本故。五、顯德故。六、顯位故。七、開發故。八、見聞故。九、成行故。十、得果故。

一、法爾故とは、一切諸佛は法爾に、皆無盡世界、常轉如此無盡法輪、如大王路、

法爾常規、無停無息、盡窮未來際。一毛端念々中、塵數身を以て、未來際に、不可說佛身音聲充滿法界、一切衆生聞かざるなし、一切時常轉法輪。

如來求心力は法爾として衆生を開發靈化妙用を爲し、因縁を待たず、是如來一切慧の性自然なり。日光の無意任運に照耀するが如し。三世一切時を通して慧日光明常恒に照臨す。法爾と云、法身法爾の徳。

二、本願力故。如來の一大靈力即ち求心力は、一切を靈化して、機熟せしめて攝取する效能力なり。例へば太陽の化學線の如く、生物を化合作用をなして、其性を熟せしむる如く、本願力の靈力は衆生の心機を靈化して淨土に歸せしむ。又本願力とは如來の自性より三展したる衆生を性を遂げて本性に歸せしむ願力なり。

是終局目的を本願力と云ふ。

三、機感の故に。如來の性徳は法爾として一切慧の光明と本願力靈化の靈力は本より已來常恒に照耀するも、衆生の機が熟して機感相應する時は、即ち開化の益を被むる。

經に、如來平等、無有改易、隨應衆生、現身說法。

偈に、有目有日光能見微細色、最勝神力故淨心見諸佛、

絕對佛身無有色聲塵相、但求平等理智增上願力、

機感相應有形色現、佛身充滿諸法界、

普現一切衆生前、應受化器、

四、爲本故。三展せられて衆生性と爲るも其根底は諸佛と同一の眞性なり。其眞性に歸復するを悟と云ふ。此に本づかざるを迷と名づく。

人佛性を具有し、此佛性は世界衆生性の中に現出して、また之を本に歸すれば佛性、無明即ち生理我の爲に覆はれて本來の其性と合一すること能はず。諸佛は其本源なり。同性より起て衆生本覺に歸すべき道を示す。梁の攝論に、無不從此法身流、無不還此法身。

七、開發故。本來眞性に回復せんには、自我根底の本性、

探玄に、衆生心中如來之藏性起功德を開發し、諸の菩薩が大乗の法に依つて修學し、無明卵を破り性徳を顯はさんと欲するが故に、其性起を開顯するに、初め言說文字に依つて其眞理を信知せしめ、而して後修行に由て顯現せしむ。經に微塵を破て經卷を出すと文あり。

爲顯爲靈徳、衆生佛性開發すれば、便成正覺、具足慧身、不由他悟、如來藏中、具足恒沙功德故、起信論曰、不空眞如、有大智慧光明、徧照法界義等。(斷絶)

### 清淨性か染汚心と爲る

本性本自清淨、而無明の爲に染せられて染心あり。染心ありと雖ども本性は常恒不變なり。そは唯佛能知、所謂心性は常に無念故、名爲不變(念は衆生心、勢力常恒、不識意識に拘はらず活動する性なり。知は意志によりて行動するもの)

一法界に達せざるを以ての故に心相應せず、忽然念起を無明と爲す。

衆生性は極大より三展して極少より向上進化す。最根底は自爾の眞性即ち神性。

無明が本として生起する生理我を染心と云ふ。六種あり。

一、執相應染。今曰く執は執意にして主我が意識的に自己の目的に向つて意志を注ぎ其意志鞏固に固執して捨てず、我執已に熟果實したる意志我。

二、不斷相應染。不斷は意志なり。主我が自己の目的を遂ん自我を形成しあるつゝ、意志なり。

三、分別智相應染。六塵中の智相境界に依つて愛と不愛とを分別するが故に、是愛憎等の感情なり境界に愛染する處の情我。

四、現色不相應……………(斷絶)

一法界を了せざる義とは、信相應地より觀察學斷して淨心地に入て隨分得離、乃至如來地、能究竟離故。

今日く、衆生性は生理我を實我と計し、感覺も感情も智力も意志も肉の生活を形成し執意して目的に向ひしのが、生理我に此世界を依屬とし五塵の境界を愛染し、つまり肉我の欲望満足を目的とし生活す。故に自己本性の方の一法界は了すること能はず。

然れども本靈性具有するが故に、直觀的に眞想觀察を修學して、自性が覺醒するようにならば、自性と如來の自性と本一の眞理が發見せらる。初には其眞理が發悟せば、如來の一切慧が自己の智となりて、靈我の光にて從本の我を返照せば、自己人生目的の執心が大に非なることを自覺し、先づ生の目的を轉す。次に從本の我意志は、不斷世界動機が爲に念々意志の働く處皆染汚なりし意志を轉す。

三、我愛肉我の情は、唯肉我を中心として愛憎を起し、感情を染汚せしは非なりと覺りて、情が清淨になり、靈我として、

四、現色。感覺五塵の欲を貪り、六塵根を染めし靈我が六塵の奴隸となり、卑野なるをさとり、自性靈界に勝妙の境を求む。

五、能見心。生理と自然の我と彼れ、また自己を中心として、生理我、自己中心とする自然の生理衝動を云ふ。本能的にして主我的の我にあらず。

六、根本業。極めて微細なる生理衝氣、生物原始の生理衝動。

(以下 斷絶)

## 流轉 還滅

四〇

自然界開展の緣起即佛教流轉門又宗教創造論

先に如來は萬有の根底にして中心たることを論じぬ。

自然界一切動植物生物の生息する自然界の建設に就ては、佛教には、古來佛學者中、唐の終南山宗密禪師程、精密に研究せるもの稀なり。流轉還滅の二門に於て、暫く宗密禪師の説に由る。

佛學者は自己心性を發足點として宇宙を説明す。故に天地人の原理を窺ふも心を以て本とす。

大乘了義の教には、天地人の中に就て、衆生を説くにも一切衆生幻化、皆如來圓覺心より生ずと。即ち本來宇宙一體の自性清淨心を根底とすれども、無明風因て動く、有漏心心所、色世界が生じたり。

絕對離相圓覺を本とす此妙心は凡夫同依、唯佛のみ圓證。衆生は本覺心體を因とし、境界を緣とし、六塵を生ず。故に楞伽に、大悲、不思議重(無明)不思議變(真如)が現識の因とし、種々塵を取て無明妄想が薰じて是分別事識の因とす。故に無明等は皆自體なく、本心を所依とす。故に圓心より生ずと。幻(馬)體なく必ず(巾)に依る。無明は本體なく真に託して起る。佛教は、萬法一心三界唯識と説も宗途異なる。今五教に約して權實を彰さば、

第一聲聞教。假に一心を説く。謂く實に外境あり。唯心が諸業より造て感招する故に唯心と云ふ。外境即心と云にあらす。心と境は俱齊と執す。

第二唯識。異熟賴耶を一心と名く。賴耶に相見二分、皆一心、三界依正は賴耶の所變現なり。所變の境界は其實は唯識。故に三界は衆生唯心の變現する處。

第三大乘實教に。如來藏、藏識、唯是一心。前七識本藏識。差別功能の別體有るにあらず。故に楞伽、藏識海常住、境界風に動せられ、種々諸識の浪騰躍而轉生す。譬

四一

へば巨海浪の如く、若干相あり。諸識心如是異亦不可得。二、摠攝染淨歸如來藏、故に一心と説く。謂く如來藏、衆體隨緣。成辨諸事、而其自性、本不生滅。

第四大乘頓教。混絶染淨、謂く清淨本心元無染淨。妄心の垢に對し假りに説て淨と名づく。妄本空、淨亦相盡、唯本覺心、清淨顯現、爲破諸數、假言一也。

第五一乘圓教。總該萬有、即是一心。謂く未だ心諸相を絶し相盡唯心を悟らしむ。然に事に觸て皆心を見る方に究竟心性を了す。華嚴に一切皆即真心、故に三義を成す。一融事相入義。謂一切事法既是真心、而現故全心之一事、心に隨て一切に入る。全心の一切隨心入一事、隨心廻轉、相入無碍。二融事相即義。謂く一事即真心なるを以ての故に、心即一切時、一時此一時、隨心亦一即一切、一切即一亦然り。三重々無盡義。謂く一切全是心故、能一切所含。一切亦唯心故、復含一切。無盡無盡。皆一一全具真心、隨心無碍。

本唯非染非淨一法界。心が之を覺せざるに由て、如來藏生滅と合して阿黎識と成る。復此を執して我法とするが故に轉じて餘七又は八種の識と成る。各識體に由て能見分を起し能見に由る故に外境現するに似たり。此境を執取して實と爲るが故に、種々別業共業造るが故に、内自心に感じ、外器界一切諸法に感ず。

## 染淨緣起

論に四種法あり。一真如、二無明、三妄心、四妄境界薰習の義あり。故染法淨法起不<sub>レ</sub>斷絶、染法者真如法に依るを以ての故に有<sub>レ</sub>無明、真如に薰習故有<sub>レ</sub>妄心、妄心薰習無明不<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>真如法故、不覺念起、現妄境界、妄境界染法緣故、薰習妄心、令其念著、造<sub>レ</sub>種々業、受<sub>レ</sub>一切身心等苦。勝鬘經に、不染而染、法身不增不減。經云、法身流轉<sub>二</sub>五道<sub>一</sub>名曰<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>。華嚴に、心如工畫師。

淨緣起とは論に、以有真如法故、薰習無明、則令妄心、厭生起苦樂求涅槃、以厭求故、即薰習真如、自信心、知心妄動、無前境界、修遠離法種々方便、起隨順行、不取

四二

四三

不念久遠重力故、無明即滅、無明滅故、心無有起、境界隨滅、心相皆盡、名得涅槃、成自然業。

圓淨とは宿機あり。圓教を聞き自身心本來清淨常樂我淨を悟る故に、不<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>有五蘊之我、貪瞋漸息、業報隨亡、稱性修行、顯發性上、過恒河沙功德、妙用盡未來際、無有斷盡、不同染法、成佛則斷、以真如法常薰習故。

## 性 起

華嚴寶王如來性起品

探玄、寶王摩尼能く寶を出す。寶中最勝所依性起法、性より出智最勝所依。

佛性論に、自性住より來て、得果に至る故に如來と名く。不改を性と名く、顯用を起と云。又真理を如と名け、性と名く、顯用を起又來と名く、性に理行果あり、理了因を待て顯て起と名、二行性開薰を待て由て、資發して果を生ずるを起と名く。三果性起とは即理行兼修生を具果位に至時合して果(斷絶)

## 終 局

佛教は宗密師の説の如く、生死と涅槃とは昨夢の如し。本より宗教は人の精神の解脱を以て目的とす。故に已に能佛理に通達せる者は自己觀念に依て自在なり。

然れども佛教は但に主觀の一面のみにて宇宙を説明せむとする如きは、亦客體の神を説明するは未だ完全なりと云ふべからず。吾人は理想に於ては、宇宙も自己主觀中なり。然れども亦一方よりは自然界に規定せられたるもの、之の天則を外にして自己の力の毫も及ばざる所なり。

五官の作用にても自己が發明にあらず。天則により吾が眼は視耳は聽くことを得。若天則を離れて全く自己の効用を認る能はず。

自己が自己を解脱を求むと否とは、亦修行信念工夫を發すべきや否の如き自由意志

は有するものなるも、亦其功を本に推せば、天則即法身より與られたる性能に外ならず。故に吾人が身心は全く宇宙大なる如來心の一分子にして、其内面に不可離の關聯を以て、我直觀は宇宙全一の内的と合一せるものとす、自己内觀が宇宙全體と一體觀なるを以て宇宙は我なりと云如きは非なり。

終局に性起と法界緣起とあり。

性起とは、自然、衆生界はもと體なし。如來實體と絶對實性、故に自然界は外觀は吾人感覺對象なれども、内部は如來絶對真如を體とする故に、

如來を終局目的としては、如來法身即ち吾人の本體たる全一の靈體にして、生理的の妄身心の本性を體とす。

自然の萬有は如來を體とするも、一切知と能との力用發生せしもの、終局目的に對する手段たり。故に性にあらず。例せばキリストと他の人類との性格に於て根本的に同一ならず、彼は神の子にして性を神に稟く。一切の人類は神の被造物なるも、性根本的に異れりと云如く、今性起とは如來の自性より起り來る性能なり。

性起と法身の性。如來は、本一大法身如來性より分身し、佛性具備せるを、行に由て如來藏中恒沙萬億功德力顯現し、大智慧光明遍照法界等の徳相が現はれ來り。而して已に果圓滿の曉には、衆生の機感に應じて化を施す。

如來性起は正しく終局に攝取せんが爲なり。

佛陀が大因緣成正覺以て衆生を度す、是緣起にあらずや、何ぞ性起と言ふ耶。答に四義あり、一に果海自體不可説、性なれども機感が緣に具、緣より起す故、緣は機今緣に違ふて自性に順す、故に性起と云。

眞性に順するが故に。

本自然界も靈界も同一の眞性より發りしも、終局に攝取する時は、如來の自性、即ち回實性に攝取する故に、性起と云。

依他偏性を離るゝが故に。

## 五 性 各 別

四八

キリスト教の人と神との性各別

大乘佛教には一切衆生悉有佛性。

草木國土悉皆成佛

衆生佛一性、衆生、人天教、人法二我實有具足す、小乘、此衆生只是一聚五蘊實法、本來無人。大乘初教、唯識所現、如幻似有、當相即空、無人無法。終教並如來藏緣起、舉體即如、具恒沙德、乃是衆生故、不增不減。經、衆生即法身、法身即衆生、衆生法身義一名異。頓教、衆生和本來盡理性本顯挺自露實無所待。

圓教、即一切衆生、並舊來發心、亦竟修行、亦竟成佛、亦竟更無新成具足理事。

## 終局は涅槃に攝取

報佛といふも、時間的自己の酬因感果の報佛にあらず。空間的主體客體の關係、即ち主體たる衆生の信仰に報對する佛なり。法佛は天則秩序の本體なれば、衆生の信不に關らず、生物の生存に資すべき設備は自然に吾人に與へらる。終局に攝取する報佛は、信仰あれば其信仰に報答して與、信念益進む時は客體の佛心も隨て増大に、また衆生の機に應化するの用も隨て大なり。信仰なきものには報酬の相なし。

報身は、一大心靈態なる一大靈力の發現なれば、信論に、自然不可思議の業用ありて、衆生に天鼓の如く無作自然にして其機に應じて現はると。

報身とは、信仰に終局に攝取する靈力の顯現なり。法身般若解脱の三徳は、報佛の衆生の信仰に對する開發解脱の靈能にして、吾人を無明生死の苦海より救靈するは此三徳の力なり。

四九

五〇

法身は衆生心の根底本體にして、絶對的實性なり。衆生は自己の一大根底即ち法身を（一）自ら迷て無明に至る。此幻化の身心を眞の我なりと認め、幻化の世界自然界なるを覺らずして實とす。故に自ら迷ふて流轉す。

自己の心源を如實に了達する時は、自然本源、天真佛なるを悟り、法佛は世界依（一）を脱して本源眞實の本體に歸趣せしむる法則の一大原則なり。

如理に此法則に依らずして成佛すべき理あるなし。

般若は如來が衆生に佛知見を與ふる處の心光なり。衆生の心眼を開く時は、自己の本性本佛の分なれば、自然智無碍智自ら覺開顯して、一切の眞理を知見認了すること。即ち衆生の轉迷開悟の日光なり。

解脱は衆生の惑業苦を解脱し靈化して佛身同化せしむる力なり。

昭和四年九月廿八日印刷

同 三十日發行

年七冊制は廢止

年拾貳冊 貳圓（郵税共）

編輯兼 山崎 辨 成

發行人

東京市小石川區藏前町五五

印刷人 小林七太郎

電話小石川一四九五

發行所

東京市小石川區水邊二ノ四四

ミオヤのひかり社

振替東京六八五一番